

## 題名「波乱万丈の激動の中で見つけた芸術と文学への道」

～ゼロベース＝無限の可能性に気づいた人生～

NPO 法人一新塾 2 2 期・日向裕一

### ① 自信なき少年時代・閉ざした心

私は、中学校 1 年生の二学期から不登校となりました。原因は、いじめ、嫌がらせ、精神的苦痛でした。当時の担任の先生からは、「登校しなければ中学校の卒業を認めない」と言われました。周囲の大人たちは、私の表明的な明るさ・元気な外面だけを見て判断をしていました。私の両親、とくに父親は仕事が忙しく母親に「なぜ、学校へ通わないのか」と強く怒りの心を持っていました。私は、遺書も書いたり、母親への家庭内暴力もしたり、泣き叫んだり、地域の保護者からは冷たい目で見られていました。そして、同級生から「害児だ」と言われたり、「お前、殺さるぞ」とかの暴言を言われてきました。私は、ますます心を閉ざしました。

ある日。保健室の先生が「適応指導教室」を紹介してくれました。そこに通う学生たちとの出会いは、私にとって本当に楽しく安心して過ごせる居場所でした。そして、当時、私の人生の支えとなったサッカーボールとの出会いがありました。私は、サッカーに夢中となり、毎日、サッカーのことを考えていました。他校の先生は、私のサッカーにたいする情熱を理解してくれて知り合いを通しフジタ・ジュニアユースの練習生として参加させてくれました。後にフジタ・ユース（ベルマーレ平塚）に所属することになりました。国際サッカー専門学院で一年間、猛烈な練習をしましたが、プロの実現は叶いませんでした。この体験が過去の私であり、心の苦しみを隠してサッカーへの道に行きました。家族にも友人にも心の苦しみを打ち明けることができなかつたです。

### ② 調理師としての道・絶望感

私は、沖縄調理師専門学校を卒業して調理師免許と技術考査（調理学科）を取得しました。広島県に帰り、飲食店で働き始めました。当時、20 歳頃です。しかし、就職した飲食店に、いじめグループが嫌がらせに来ました。結局、嫌がらせが続き一ヶ月で退職して、心の病になっていました。当時は、いじめグループから逃げることを考えて県外のコンピュータ専門学校に入学しました。ですが、体調が悪化して中学校時代と同じく不登校になり、その間、救急車で何度も運ばれました。

### ③心の爆発

東京での新たな挑戦は、作詞家になることでした。私は、12歳頃から詩を書くのが好きでした。私は、音楽プロダクションのオーディションを会場・東京国際フォーラムで受けて合格しました。スタジオで作詞担当となり、プロジェクトに参加しました。また、音楽業界セミナーにも積極的に出席したり、一生懸命に音楽活動していました。しかし、突然、身体が震えるほどのめまい、心の爆発みたいに猛烈な不安感となり、荷物をまとめて広島県の家へ帰郷しました。22歳頃です。結果的に、パニック障害、心身症、思春期障害、統合失調症の病気と診断されました。お薬の副作用と自暴自棄で体重も短期間で100キロとなり、最高体重160キロになりました。リストカット、自殺未遂4回、肺水腫、心不全、呼吸不全などで意識不明の重体にもなりました。その後も入退院を繰り返しました。

今現在、私が住んでいる場所は、広島県豊田郡大崎上島町です。母親の実家である築100年の古民家に住んでいます。私は、大崎上島の出身で中学校時代は、広島県内の他の地域に住んでいました。根本的な原因は、中学校時代の「いじめ」「中学校時代に周囲の理解がなかった」ことです。

### ④心と愛の気づき

私は、プロレスラーの友人とインド、アメリカには一年間で四回、千葉県での合宿も数回などを経験しました。私がインドに行ったのは、アーユルヴェーダなどの療法を受けるためでした。ある時、私は、自分自身にたいして素直に見つめ直しました。それまでは、殻に閉じこもり現実逃避していました。国内外での経験によって言葉では言い表せないほどの真心と愛を感じました。一つは、母親の愛情でもあります。ずっと、私と共に苦しい体験をしている中でも愛を絶やすことはありませんでした。実は、私がインドへ旅をしたのも母親の直観でした。そして、プロレスラーのホームページを見てインドへの旅を知りました。それが、一つの大きな転換期の始まりでした。

私の自己体験で言えば、直観、素直な気持ち、愛と心、人生観、世界観、地球観、宇宙観、死生観が重要だと気づきました。そして、母親の寛大な愛情に

よって世界への旅もできました。様々な価値観、文化を知り気づき、少しずつ人間成長できました。

## ⑤古里の大崎上島での無から有の実現

22歳のときに古里の大崎上島に帰りました。母親に「中学校時代が辛かった」と伝えたとき、涙が溢れだしました。その後、心の病も少し安定したときに、8年前に「ヒナタ文学」という冊子創刊の一号を自費出版しました。部数は、50部。人生のスタートラインに立てた気持ちになりました。年々、部数は増えてゆき、今現在、10号を自費出版して累計一万部を達成しました。また、ホームページには、ヒナタ文学7号～10号の電子書籍（無料）を掲載しています。そして、3年前に古民家にヒナタ文学堂という観光案内所・休憩所・憩いの場・フリースペースをオープンしました。今まで大崎上島に無かったことを誕生できた喜びは、私だけではなく、両親も幸せに感じています。それが、私の人生観をチェンジすることになりました。そして、私は、詩人、作詞家、作家、エッセイスト、写真家の目標ができました。文学だけではなく、教育、心の相談、カウンセラー、食育、福祉、観光、町づくりも積極的にしています。ヒナタ文学の任意団体も設立しました。2016年に三大宮様賞の「東久邇宮記念賞」と、文化の日に「東久邇宮文化褒賞」を受賞しました。また、2018年には、冊子・ヒナタ文学11号を発行する企画もあります。

## ⑥一新塾で感じた同志の存在

私は、生まれて初めて同志という言葉の深さに気づきました。友人、親友、家族と違った、何かに挑戦できる一新塾の仲間の存在は、私に生きる情熱を感じました。私が一新塾に入塾したのは2008年、志と信念をもって心の病から脱却して歩んでいきたいとの思いが湧き上がったからです。当時、私は一新塾の研修で「ファミリー・コミュニケーションズ」というプロジェクトを立ち上げました。理由は、私と父親の親子関係です。私は、父親からのアドバイスも、父親への相談も、父親との会話もなかったです。家族が会話をする事、朝起きて「おはよう」などの基本的なプロジェクトですが、私の人生で父親の存在は、猛烈に恐かったです。父親は父親で家族を強く考えての企業戦士でし

た。このプロジェクトは、今現在、「ファミリー・コミュニケーションズ」は完了して、毎日、私も母親だけではなく、父親との会話も楽しくしています。その経験は、現代社会の家庭でも言えることです。プロジェクト立ち上げ当初に活動していた一新塾の仲間にも大崎上島へ来て頂きました。私にとって同志とは、まずは、一緒に自分自身を見つめ直し、一緒に家族を見つめ直してから始まることだと感じました。

## ⑦大きな夢・生きる勇気・無限の可能性

私の大きな夢は、日本代表の世界詩人になることです。過去ではなく、現実を大切に生きて、未来へ前進してゆきます。そして、人と人との善い出会いは、無限の可能性を生み出しています。そして、かつて私を苦しめた「いじめグループ」を許す心で生きています。私は37歳となり命と生きる勇気、多くの助け・支え・理解に感謝しています。今現在は、現実を直視して死生観を常に考えて生きています。自分自身にたいして失望・悲観などを体験したことが、今となれば人生の肥やしとなっています。

## ⑧将来的ビジョン・心の時代へ

私の古里・広島県豊田郡大崎上島町は、瀬戸内の真ん中に位置する離島です。温暖でエーゲ海のような場所です。大崎上島には橋が架かっていませんので日本を縮図した小さな楽園とも言えます。私の将来的ビジョンは、豊かな心の人間成長が重要であり、広い価値観、広い視野と、柔軟な心も大切だと感じています。世の中は、お金と物質だけではなく、人間としての幸せな人生の道を創りたいです。たしかに、橋が架かると交通にしても便利になってゆきます。しかし、大崎上島は、橋の架かってないことで移住者も増加しています。また、

海外の旅行者も訪れています。小さな楽園の自然あふれる島の魅力を世界へと発信できるようにしてゆきます。日本一幸せな離島社会の実現こそ、大きく言えば日本社会の幸せへとつながると感じています。

公式ホームページ検索『ヒナタ文学』

公式ホームページ・アドレス <http://www.hyuga-yuichi.com/>